野木小学校
同窓会報
第2号
昭和62年3月
野木小学校同窓会 編集部

会報第二号の発刊にあたって

野木小学校同窓会長　倉谷静夫

会員の皆様には、お元気でお暮らしの事と存じます。日頃は本会のために何かと御支援を賜り有りがたく厚く御礼申し上げます。

一昨年会報をお送りいたしましたが、ようやく第二号ができ上がり、皆様方にお届けできる事になりました。投稿下さいました方々に厚く御礼申し上げます。

グランド整備も一通り終りましたが、写真のように、県道から学校迄の道路の拡巾と、歩道ができ上がりましたし、バス停留所も立派にできました。六十二年度には、東校門から西校門迄の舗装もできます。そうなれば、近辺にないすばらしい学校となります。又、野木公園が、学校周辺に作る計画もあるようです。野木地区の中心として着々と整備され大へんな変貌をとげました。これもひとえに皆様方の御協力と関係各位の御支援の賜と厚く御礼申し上げます。

昨年の秋に、野木小学校の旧職員の方々が学校に来られたそうです。立派になった学校に驚かれ感激されたそうです。旧のグランドに立って、昔の学校は、この辺りが職員室で、この辺りが、講堂とのつながりの坂の廊下で、などとひとしお感慨にふけっておられたと聞いております。

遠くはなれた方々からは、会報を手にして、野木の匂いを感じ、幼い頃の昔をしのびましたという、話も聞きました。大へんうれしい事と思っています。

会員の皆様方全員に会報をお届けする事はなかなか大変で、理事会でもよく論議されます。住所が変ったりした場合は事務局に御連絡下さい。又、同窓会を開かれた様子や、原稿など是非事務局へお知らせ下さい。

会員の皆様方の御多幸をお祈り致します。

卒業式を終えて

校長　大岸　淳

会員の皆様方には益々御健勝の事と拝察致します。

学校では私ども十二名の職員が百二十余名の小さな皆様方の後輩達をお預かりしておりますが、子供達はすこぶる元気で、しかも誠実な態度で努力しております。そのまじめさは、他校との合同行事の時に歴然として目立ちます。そんな姿を見て、「自分もこんな子供達を教えてみたいなあ。」とつぶやきをもらした人が何人もいるとのうわさを耳にしています。

これひとえに皆様方が後輩達とその学び舎にお寄せ下さる御好意と御協力の賜物でございまして厚く御礼申し上げます。

三月十九日に卒業式を挙げまして二十三名が巣立って参りましたが、その子供達に校長式辞として私は次のように申しました。

……（前略）……　ところできょうの皆さんは一段と立派である。今までもよその学校といっしょになった時、君達のまじめな態度は他校に絶対負けないものだったから中学生になってもまじめにやってくれると信じている。ただ初めの頃のまじめさをつい忘れてしまう人がいては困る。私は長い間中学校に勤めてきて、まじめさを失っていく生徒を多く見てきた。この体育館の右前の、そこの大きな額に〝初志貫徹〟という言葉が掲げてある。君達の大先輩、中川知事さんが野木小学校の君達の為に書いて下さった額で、意味は、初めの志は貫き通せということ、〝よし、まじめにやるぞ〟と心に決めたら最後までその気持でやり通せということだ。上中中学校の体育館には〝稚心を去れ〟という有名な言葉が掲げてある。これは、いつまでも人を頼りにするような幼な心、幼稚な心を捨てて、自分で考え自分の力でがんばれという意味だ。ところが生徒の中には稚心を捨てないで、まじめな心を捨ててしまう者が何人かいる。どうか野木小学校出身の君達はそうならないで欲しい。君達が昇降口へはいって毎朝見てきた「野木っ子のめあて」は何だったか、〝終始誠意ひ

とつ〃、始めから終りまでまじめな心、誠の心、これひとつということだったね。中学生になっても大人になっても君達は一生野木っ子である。中学校全体に、上中町全体に、野木っ子の良さを広めてもらいたい。これが卒業した君達に私が希望する最大のものである。（後略）

――※――※――

間もなく四月、新年度が始まります。私共職員は野木小学校に勤められることの幸せをかみしめながら、皆様の後輩達、野木っ子達の教育に力の及ぶ限り努力致します。

どうか今までに変らぬ御理解とお力添えをお願い申します。

思い出のまま

第十六回卒　松宮徹雄

私が小学校に入学したのは分校でした。この分校は、杉山・堤の中間の畑の中にあり三年間学びました。

分校ですから教室と体育場の二室しかありません。その教室で三十名程の子どもが仲良く勉強しました。雨の日は遊ぶ場所も十分ありません。天候が少しでもよければ外へ出て元気に遊びました。先生がいつも教員室の窓から見ておられた事が思い出されます。

近頃、畑へ行く途中に分校の前を通りますが建物を見る度に昔の事が、昨日のように思い出されます。私の学んだ分校は当時のままですが、現在は内職の工場に使用され廃校となっています。

四年生から本校に行く事になりましたが、学校迄は大変遠く、苦労しました。集落の上級生と共に集団登校するのですが、特に雪の日の苦しみが思い出に残っています。積雪が三十センチ程度ありますと、誰も先頭を歩く者がなく、家から父兄に応援してもらって、雪を踏みしめてもらいながら、藁の靴をはいて隣の集落迄送ってもらいました。

学校に到着した頃には、授業も始まっていますからぬれたままで寒さを辛棒して授業の終りを待ちます。休み時間には、木炭ストーブで着物を乾かします。二月の頃には元気も出てきて体操場に出て遊び回りました。

我々が卒業する頃に体育館（前の講堂）の新築の話があったようです。こうして六年間を終え、ある人は中学校へ、又社会人として旅立って行かれました。私達は高等小学校へ進み更に二年勉強して卒業しました。

この頃大正天皇が亡くなられ年号が大正から昭和となりました。

卒業してから家業の農業をしましたが、青年学校という制度ができて、週二回位い小学校へ通い、軍事教練を教えられました。そして二十才になり軍隊に入隊しましたが、上海において戦争が始まり戦友の一部は上海に向い、出征して行きました。その後支那事変、大東亜戦争へと突入し、暗い青春時代でありました。やがて戦争も終ったものの、つらい戦後の暮しが続きましたが、思い返しますと夢のような気が致します。

この頃では、小学校時代の同級生が、年一回集まり、思い出話に花を咲かせています。

六十年の年の重みを感じている今日この頃ですが元気で居られる事は幸せです。

屈折

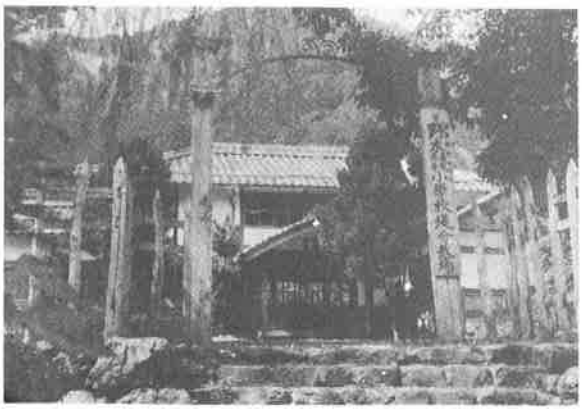
第三十六回卒　奥本実

五十年近く経ってしまうと、その頃のできごとの記憶が殆んど失せてしまうのが自然であろう。けれども、五十年むかしの野木小学校の旧校舎、校庭の桜、奉安殿、花崗岩の校門や橋。――等の光景が懐かしく甦ってくる。

その頃、私たち一年の担任は、玉置の奥本スガ先生であった。先生は、いつも着物姿で二〇よく歩いて登校された。途中、熊野神社前を通られる時には、ていねいに一礼をして通られた。この姿を見て、神に対する敬虔な心精が子どもの心に培われたように思っている。

教室での国語の授業がたいへん楽しく、先生は、一字、一字ていねいに板書され、文字の書き方をきちんと教えてくださった。

サイタ
サイタ
サクラガ　サイタ



懐しい堤分教場　第２号
昭和44年に廃校になるまで、杉山、堤区の児童が３年生まで複式授業で楽しく勉強したもの。

この文は、尋常小学校国語読本巻一の最初の文である。

当時の教科書は、文部省国定教科書といって、日本中、同じ教科書で勉強することになっていた。

明治・大正時代の国語巻一の読本では、ハト、マメ、マス、ミノ、カサ、カラカサのように単語から文、文から文章へと進んでいく方式が長い間とられていたが、昭和の初期になると、改訂されて文として教えられるようになった。サイタ、サイタ……この文では、単語から始まるのではなく、桜の咲いたのを喜ぶ叫びから始まっており、文芸的な色彩豊かな国語の教科書となった。

昭和の前半期は、空前の経済恐慌、五・一五事件、満州事変の勃発、国際連盟の脱退等、その頃の社会情勢は、大きく揺れ動いていた。

昭和十二年（一九三七）。日中戦争が始まると、国内はすべて戦時体制となって、学校教育もその方向へ屈折していた。

軍国主義教育が一段と強化されてくると、学校の講堂の壁には、太い大きな文字で、神国日本・忠君愛国・武運長久・質実剛健・滅死奉公と、模造紙大に書かれて張ってあった。

日本は、アジアの平和のために戦うのだと教えられ、大きくなったら、国のために、兵隊になってご奉公するよう教えられた。

七・五・三のお祝いに、軍人と同じ形の服や帽子を着てお宮へ参る子もいた。

歌では、軍歌が流行し、男子は、〃紅い血潮の予科練の七つ釦は、桜に錨……〃と歌いながら、大空の若鷲となることを夢みながら、雄姿な兵隊になることに憧れていた。学校の体育では、男子は木刀。女子は薙刀を手に、大声で、「エイ！エイ！ヤア……。」とかけ声勇ましく、基本の技の練習に励んだ。

それから、日本は、次第に情勢が悪化し、アメリカのB二十九爆撃機が本土へ侵入し始め、東京大空襲。広島、長崎へ原爆投下。そして運命の日。――昭和二十年八月十五日。

敗戦によって、日本は民主主義国家の建設に向って再出発をした。やがて、学校教育法が公布され、六・三・三・四の新教育制度が発足した。

こうして昭和の前半期は、激動と、屈折の連続であった。

思えば、戦争中、国家主義的な教育を受けて育った私であるが、新しい民主教育を学校で教える立場となってから今日まで、三十数年の長い生涯を、教師として学校に勤務させていただいたことを感謝している。

時の流れとともに、やがて、戦争体験者は次第に少なくなり、新人類の世の中となった。

そして、ものの見方、考え方や価値観が年代層により、はっきり違ってくるであろう。

現在の日本は、物に恵まれ過ぎて、自然や物に対する感謝の気持ちや、大事にすることを忘れている。更に、青少年の非行。いじめ。自殺。学校や家庭内暴力。登校拒否の激増等。憂慮すべき、深刻な社会問題となっている。こうした現状の日本の社会を思うと、不安と教育の悲しむべき形骸である。

今日、臨教審において、二十一世紀を志向し、今後の教育の在り方について、その基本方針や目標がまとめられ、根本的に、日本の教育制度が見直され、改善されることになる。日本の教育も、新しい時代に備えて大きく変ろうとしている。つまり、知育偏重の教育から、人間性豊かな、国際的視野の広い人間教育へと軌道修正がおこなわれる。

昭和の時代は、極めて屈折の多い苦難な道であった。

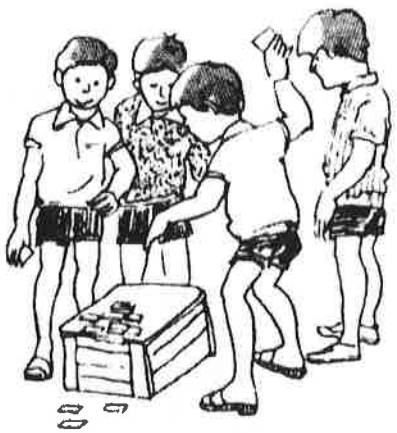
ファッシズム・戦争・敗戦・復興と、めまぐるしい時代の様相のもとで、現在の日本があり、今日の繁栄があることを忘れてはならない。

日本は、今、世界での経済大国であり、世界一の長寿国家となっている。これは誠にありがたいしあわせなことである。

その反面、世の中には、自己中心にものごとを判断し、権利は主張するが、責任や義務を忘れたエゴイストが多くなっている。

他人を思いやる、親切心や、みんなのためにつくす奉仕の精神を養うことは、教育の今日的な課題である。

現在の子どもたちに、物質不足の戦争当時、一日一合のお米でがまんした話をしても、昼夢に等しいことかもしれないが、戦争の悲惨なことを体験している者の責任として、今の子どもたちへ言い伝えておくことが大切である。――二どと戦争を繰り返さないために。――――時代は、物の豊かさから心の豊かさへと屈折し、時は、一秒の休みもなく、刻々と二十一世紀へ向って進んでいく。



修証義の第四章、発願利生の経文に、〃一銭一草の財をも布施すべし、此世佗世の善根を兆ず、法も財なるべし、財も法なるべし〃と書かれている。

このすばらしい処世訓を生活に生かし、互いに品性を養い、自我でなく、欲を世のために、人のために、大きく生かすことができるように努力したいものである。

私にとって、むかしの二階建ての木造校舎は、母校であ

り、終生忘れることのできない心のふるさとのようなものである。

現在新築された本館の南側に立派な庭園が造成され、二ノ宮尊徳先生の像がむかしのままの姿で移設されている。私たちの子どもの頃は、修身（今の道徳）でお習いし、「手本は二ノ宮金治郎……。」と歌われた程で尊敬する人物の筆頭であった。

しかし今の子どもたちには、親に孝行することを話したり、ランプの明りで勉強した時代のことを教えても納得しないし、不自然である。

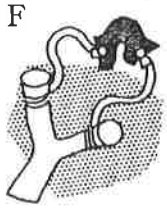
しかし、親や自然のめぐみに感謝し、互いに助け合い、世のため、人のためにつくす心がなければならない。

しばらく、たちどまって、二ノ宮尊徳先生の像をみつめながら、五十年前の母校のようすを懐しく想起している。

母校とは、心のあたたまるありがたい存在である。

回想

第三十七回卒　K・F



最近、中国残留孤児の訪日調査団の一行が何回となく日本をおとずれ、日本の土を踏みたい肉親への熱い思いを寄せている。

戦乱にまきこまれ、生死をさまよい明日の命もわからない、想像もつかない大混乱の中でよくぞ生きていてくれた。自分の生活するのが精一杯の時節でありながら、よくぞ日本人を恨まず、育て御世話して下さった中国の養父母に対して、心からお礼申し上げたいと思いです。

まだ物心のつかない自分であったらどうなっているだろう。日本国民を食い物にし、二百六十万人の将兵と数百万人の一般人を死傷させた日本の軍閥を恨まずにはおられない。とは言っても、今さら仕方がない。今後は互いによくなるよう努力と協力が必要である。

当時、我が日本の国内においても同様に、各都市は米軍機のB29により爆撃を受けた。福井県でも二十年七月に福井と敦賀が爆撃を受けて焼け野原となったことと、三宅駅でも七月三十日米軍の艦載機（グラマン戦闘機）による機銃掃射により貨物車が動けなくなったことは、今でも忘れることが出来ない。

二十年八月十五日戦争は終わったものの、戦後の混乱と国交が無かった為に、四十年もの永い間日本人孤児は元より、食うや食わずで我が子同様に育てて下さった中国国家に対しても頭が下がる思いです。昨年暮れに中国を訪問して肌身で感じ、感謝の念でいっぱいでした。

まだまだ中国一般国民の生活程度は非常に低く、我々現在の日本人では想像もつかないぐらいの生活程度であり、日本の戦前から昭和二十五年ぐらいの生活程度であります。テレビどころか電話、ラジオすら持っている人は少なく、住んでいる住宅その物は、中国国家の物で個人の物でない為、家賃を払っているとの事であった。家の中には裸電球が、夜になると明かりをかもし出している。中国独特の土塀とレンガ造りの家が多く、何を作るにしても人海策戦で、水道工事の現場と道路改良の現場を見ることが出来たが、日本のようにブルドーザー、ユンボ等の機械もなく、長靴をはいた労働者がスコップ、ツルハシを持って泥だらけとなって働いているのが印象に残った。日本人孤児が多くいる旧満州方面は、私が見た中国よりももっと生活のしにくいところと聞き、やりきれない思いでした。

険の肉親を求めて来日され、肉親に逢えなかった孤児の方々も気を取りもどし、日中友好と世界平和の為に力添え願いたい思いです。

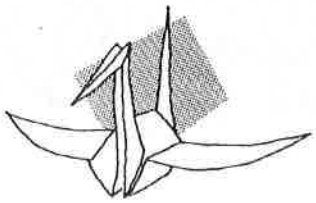
戦争という爪跡は、私の脳裏に焼きついてはなれない。四十三年前、国内においても戦禍をのがれ、大都市の児童（生徒）の集団疎開が強制的に行なわれた。その中で、我が村（野木村）杉山の清月寺へも大阪府布施市の小学校から集団疎開され、二十年八月十五日の終戦を迎えられた方々、今健康で暮らしておられるだろうか。当時、木造の野木小学校へも、時々先生と一緒に何回も来られたことを時折思い出します。いつも軍歌を口ずさみながら、焼けつくような砂利道を、杉山から武生までの四キロの道をわらぞうりをはいて、いつも同じであった。食べる物もなく、耕すことと、米・英と戦うことしか教えられなかった。あの時が走馬灯のように思い出される。又、親せきをたよりに個人的に疎開された人も多く、私、[illegible]級生も七名の方々が疎開してこられました。

今は五十過ぎ、国家財政も安定し、過去の不幸な戦いはうそのようであり、現在の小学生では想像もつかないのがあたり前であるが、我々から見ると校舎、教室はもちろん、校庭（グランド）、用具といい何から何まで本当に良くなったものだと思います。今年は武生のバス停から学校まで道路も整備され、一段と良くなった。

こうして日本と中国を比べて見ると、日本のありがたさ、平和の尊さを忘れてはならない。

いついつまでも平和を願いたい、思いのまま。

兼田　K・F



野木小学校を卒業して

第四十五回卒　真田隆子
旧（旧姓 宮川）

小学校を卒業して、数えてみれば三十三年。月日のたつのは早いものです。

学校を卒業して郷里を出て都会で生活をしていますが、毎年二、三回は帰省し小学校の前の新しくつけられた一直線道路を通ります。小学校時代、山すその長い道のりを友達と道草をくって通ったこと、犬に追いかけられて、一目散で逃げ帰ったこと。深い新雪の中、大人の人たちが通学できるようにと、足で踏み固めてくれる後をついて登校したこと。一般家庭に電話がなくて、電話のかけ方の練習のため近くの役場まで出かけ、学校と役場の二班に分かれてかけあいっこをしたこと。友達同志で村まつりの訪問しあいっこをし、友達の家で泊まったこと。等々、忘れられない記憶として残っています。

長い学校生活の中でも小学校時代が特になつかしく、思い出深く感じるのは、六年間一のクラスで、人数も少なく、住まいも家族も全て知り得た、田舎の環境のせいとも、今の子供ほど忙しくなく、のんびりと過ごせたせいなのかとも思います。

ラジオもテレビもなく、塾や習い事もせず、雑誌やおもちゃもほとんどありませんでした。これらのことが幸いしてか、子供同志で工夫して結構おそくまで遊びました。こうして、同級のみんなを理解し、仲よくなり、いつまでも忘れない人間関係ができたのだと思います。

こうした友人と会える郷里には、幾つになっても足が向いてしまうのです。

小学校の思い出

第五十三回卒　田中栄美子

小学校を来業してから早や24余年、自分の子供が、母校の野木小学校でお世話になる年令になってしまいました。

恩師の先生方も皆んな定年でやめられましたが、5年生、6年生の2年間、受持ちであった竹内教頭先生だけが、今も野木小学校にご活躍されております。

子供の運動会など行事で小学校に行く機会がありますが、懐かしい先生に、お会いするとふと自分の小学校時代を想い出す事があります。

武生の裏山へ松葉取りに行って、松葉ごはんをたいて食べた事、ストーブの中に入れる薪のたきつけの杉葉拾いに出かけた事など……。

校舎も鉄筋のりっぱな建物にかわりましたが、目をつむれば　すでに取壊された旧校舎が目に浮かびます。講堂から職員室へ行くときの坂ばった廊下、そのところに大きな水槽があって魚がたくさん泳いでいた事、学校の前の小川もよく覚えております。これらは竹内先生と過した高学年の本校の想い出ですが、私のなつかしい母校は、もう一つ、三年生まで通った分校があります。

昭和45年に分校は廃校になり、杉山の子は現在、一年生から野木小学校へ通っておりますが、私達の時は一つの教室に一年生、二年生、三年生と混合で、先生が一人、背中合わせにすわった学年をあっちへ行ったり、こっちへ来たりで、器用に教えて下さいました。

学芸会や運動会は、本校へ行きました。4年生から本校へ行きましたが、大勢の中に分校の子が入るものですから同級であっても、本校の子がこわく、なかなかとけ込みにくかった様に覚えております。

現在の様に、一年生の時から一緒に学校生活が送れる事は、喜ばしい事だと思っています。

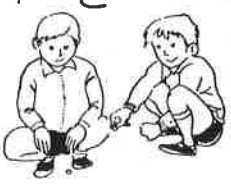
廃校になった分校は、そのままの形で工場として使用されておりますし、分校のシンボルともなっているイチョウの木は、今も尚、老いることなく毎年ぎんなんの実をたくさん付け、衣替えの頃には、あざやかに黄葉しています。実家へ行くときには、ふるさとの玄関としてなつかしく迎えてくれます。

現在、勤めと家事、子育てと多忙な中に幸せを感じる毎日を送っています。この日々も先生から受けたお人柄や、この野木小学校で学んだ友達の影響もたくさんあります。

野木小学校の卒業生としての誇りを持って毎日毎日を大切に生きていきたいと思っています。

野木小が好き

五年　井上敦子



私は、この野木小学校で五年間生活をしています。でも、学校のことで「不便だなあ」とか「いやだなあ」と思ったことは一度もありません。

私は水泳が好きです。夏になるのが楽しみです。新しいプールで思うぞんぶん泳げるからです。クロールなら百メートルは泳げるようになりました。水泳の季節になるとプールのそうじをしなければいけませんが、野木小学校のプールはステンレス製なので、そうじも簡単です。

校庭も去年、新しく、広くなりました。サッカーと野球が一度にできるほどです。今年は二月に雪が積もらなかったので、昼休みに男の子はよくサッカーをしていました。私はあまりサッカーはしませんが、遊具で遊びます。ブランコもすべり台もシーソーもおもしろいのでよく遊びます。今までは、外で遊んでもすることが大体決っていましたが、今では色々選んで遊べます。

野木小学校には、いじめはないと思います。給食はみんなでランチルームで食べているし、児童会の集会もみんな楽しそうだからです。七夕集会やドッジボール大会などもとっても楽しかったです。二月十四日には、なわとび大会がありました。長なわとびで、連続とびと全員とびです。五年生は、みんなで協力してがんばって練習したので、二種目とも最高記録が出せました。

私は、広いグランドも遊具もランチルームも大好きです。仲のよい友達はもっと好きです。私たちはもうすぐ六年生です。野木小学校をもっともっと素晴しい学校にするため、みんなでがんばろうと思っています。

我がクラス

六年　金田智之

今のクラスは進歩している。どんな所が進歩したかを、次に説明する。

まず、最後までやりとげる努力をしている。算数の文章題が、最後まで出来なかった時、家で、一粒の米にやっている。学校でも分からなかった問題を一生けん命にやっている。

授業中に出来なかったのを家で実験したり、考えたりする人がいる。理科だと、実験をしてみたり、国語なら発表する用意をしている人がいる。

水泳のとき二十五メートルを全員泳いだことがある。その時は、いつ[illegible]練習よりかきつかった。口や鼻に水が入ったり、いやな毎日だった。何回も何回も泳ぎ、へたへたになるまで泳ぎまくった。泳げない子が一人いた。その子はいやだという。けれど先生は車に乗せて、プールに「連れてきて」泳がせた。その子もやっとで二十五メートル泳げるようになった。このクラスは、最後までやりとげたのである。

次に、何でもていねいに出来るようになった。国語の時間に、今までは「ていねいさがない。」とほとんどの人が言われていた。けれど、今になると何にも言われないのである。それは毎日、日記をくわしく書いているからだ。もう一つは、論文を書いたからだろう。

算数の時、計算をまちがえたら「ていねいさがない。」と言われていた。今まではそうだったけど、今は計算ミスがなくなってきたのである。それは、算数の文章題をしているからミスがないのだろう。

初めに書いた日記も、最近までは「ていねいに書きなさい。」と先生に書かれていた。でも、それがなかなか直らずだいぶ、苦労をした。

第三に、クラスがまとまってきた。算数の分からない所などは、今まで自分で考え方を教えてもらっているのだ。

まだ、ぼく達のクラスでは週に三回みんなで遊ぶことになっている。今までに、遊ばなかった女子が、遊ぶようになってきた。ひまなのか分からないけど、遊んでいる。女子は、みんなで一緒に遊んだ方が面白そうだから、やっているにちがいない。この遊びで、クラスがまとまってきた。

以上でクラスの説明を終わる。

ぼくは、後の残りの日までには、クラスが立派になっていて[illegible]うにしたい。

今のクラスでもまだまだ、いろんな事があるけれど、それを直して卒業したい。

最後の最後まで、みんなで協力し合っていきたい。このクラスが、最後まで進歩しているといい。

編集後記

入学式も終った。人間の生涯には、いろいろな節目があるが、小学校の入学式ほど絵になるものはないだろう。

〝入学式ときどき母を眺めけり〟

今年入った子供達は、大学生になる頃、二十一世紀を迎える。二十世紀ほど世の中を拡大した時代はなかったであろう。テレビも、ロケットもみんな教育の成果の象徴だ。そして二十一世紀、高度情報化社会の影響が大となろう。今でも、コンピューターのキーをたたいても文章のにがてな人間が続出しまいか心配されている。

さて、時には昔の思い出や、感想など文章を書くことも大切。特に若い人の原稿を待っています。

◎同窓会員名簿の残部がいくらかございます。ご希望の向きは、送料実費八〇〇円を添えてお申し出下さい。

連絡先　〒九一九－一五
福井県遠敷郡上中町武生
野木小学校
☎〇七七〇（五七）一三〇〇